

「論理性」を重視した現代文指導で

次代を生き抜くたくましい「軸」を育む

教科学習に取り組み上で、「このように勉強すればよい」という学習方略が打ち出せることは、生徒にとって大きな学びのモチベーションになる。済々黌高校3学年国語科が生徒に徹底する「論理的思考」は、学習の見通しを生徒に提供するだけでなく、変化の大きな社会の中でも常に論理的に考え、進むべき進路を選択できる素地を養う。

現代文の学習方略を 論理性の中に見いだす

済々黌高校の3学年国語科では、現3年生が入学して以来、論理性に重きを置いた現代文の読解、記述指導を展開している。中学校で学力上位層だった生徒が入学する同校でも、多くの生徒にとって現代文は「何をどう勉強すればよいか分からない教科」だと、益田啓史先生は論理性重視の指導の背景を説明する。

「私は、国語には『芸術としての文学的側面』と『論理的側面』の二面性があると考えています。多く

の生徒、そして教師も、その文学性に目を向けがちなため、学習方略がなかなか見つけれず、生徒からは『どう勉強すればよいか分からない』といった声が上がってしまうのです。文学的な面白さは十分に伝えながらも、『国語はこう勉強するべきだ』という学習方略が見いだせるように、論理性を重視する指導を徹底してきました」

現代文の授業で扱う素材文は、中学校までと比べて文章の内容が格段に難しくなる。それまでは感覚で正解を導いていた生徒が、「本文の内容が理解できない」「設問文の意味

がつかめない」といった状態に陥ることもある。そんな時「読書量が足りないから分からないのだ」といった言葉で生徒を突き放したくなかったと、橋本淳先生は語る。

「他の教科の学習でも頑張り、更に部活動にも没頭している多忙な生徒に『読書を通して読解力を身に付けなさい』と言うのは酷な話です。国語が教科である以上は科学的でなければならぬし、大学入試で課されているのであれば、そこで求められる論理的な読解力、記述力を授業の中で養うのは私たちの責任だと思います」

新入生向け宿泊研修で 国語学習の取り組み方を修正

論理性を重視する指導は、入学後すぐに行われる宿泊研修でスタートした。そこで生徒たちに「国語は論理だ」「数学と同じように、論理的に考えるプロセスがあれば必ず正確な読解や答案にたどり着く」と、これまでの学習観の修正と高校3年間での新しい学習観の確立を迫った。

「生徒の反応は『国語がそういう教科だとは考えたことがなかった』というものでした。『これまでの授業では、なぜそう考えるのかと聞か

熊本県立済々黌高校

益田啓史 ますだ・ひろし

教職歴24年。同校に赴任して4年目。国語科。3学年担任。「有遠慮」

熊本県立済々黌高校

國生麻衣子 こくしょうまいこ

教職歴13年。同校に赴任して6年目。国語科。3学年副担任。「日々勉強」

熊本県立済々黌高校

橋本 淳 はしもと・じゅん

教職歴10年。同校に赴任して2年目。国語科。3学年担任。「過猶不及」

熊本県立済々黌高校

◎正倫理明大義（倫理を正しうし大義を明らかにす）、重廉恥振元氣（廉恥を重んじ元氣を振るう）、磨知識進文明（知識を磨き文明を進む）の三綱領を建学の精神とする。「文武両道」を標榜し、部活動加入率は9割を超える。スーパーグローバルハイスクール（SGH）指定校。

◎設立 1879（明治12）年

◎形態 全日制／普通科／共学

◎生徒数 1学年約410人

◎2014年度入試合格実績（現浪計）

国公立大は、京都大、大阪大、九州大、熊本大などに329人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、早稲田大、同志社大、立命館大などに延べ474人が合格。

◎URL <http://seisekkoed.jp/>

れることもほとんどなかった」という声もありました。そうした生徒に、本文の正確な読解と論理的思考があれば現代文の成績は上がることを理解させ、学びの意欲を高めることも目的でした」（益田先生）

現3年生が参加した宿泊研修では、中学校で学習した太宰治の『走れメロス』を教材に、実際に設問に取り組みながら論理的な思考の大切さを指導した。例えば、「次の文を読んで後の問いに答えよ」と設問で指示されているにもかかわらず、文章の内容を逸脱して自分の経験や感情などを持ち込んで答える生徒が少なくなかったという。

「そうした解答を例に、『これは、私はこう思うという感覚に頼って答えを導いている』と説明しました。もちろん、感覚による解答が間違っていない時もありますが、それは偶然にすぎません。文章に書いてあることだけを根拠に全ての受験生が公平に解答できるように問題が作られているのが大学入試の現代文なのだ」と話し、また、それが言葉の正しい

運用能力となり、考え方や生き方にも影響を与えることを訴えて、学習観の転換を求めました」（益田先生）

単元に入る前に

読解内容を問う設問を作成

日々の授業で心掛けていることは、思考のプロセスを省略しないことだ。まず教師が「こう思う」といった主観での説明を避け、「本文にこう書いてあるから、こうした解答にしなければいけない」といった客観的な説明をするように配慮している。そのためには、素材文のどの部分について生徒に考えさせるか、入念な教材研究が当然欠かせない。そこで3学年国語科では、1年次より毎回新しい単元に入る前に、「この素材文では、授業で生徒に何を考えさせるのか」を設問としてまとめ、共有している（P.22図1）。

「新しい単元に入る1週間程前から、どういう設問を作ればその素材文を生徒が論理的に読解したかを確かめられるか検討を始めます。そこで作った設問は、そのまま授業プリン

トで活用され、更に定期考査の問題骨子にもなります」（益田先生）

設問の難易度はセンター試験の設問を記述問題にするようなレベルだ。単元ごとに担当教師が作問し、夏目漱石の『こころ』では、50字から120字程度で答える設問が30問程作られた。論理的な読解を確認できる設問になっているかを確認するために、お互いに解答例を作ってみることも多いという。設問と解答例を共有した上で授業に臨むので、授業の根幹は学年内でぶれることがないと、國生麻衣子先生は言う。

「生徒に『実は、この設問は私と益田先生とで解答が違ったんだよ』と紹介し、どちらがより論理的で納得できる解答かを、考えてもらうこともあります。先生たちも一生懸命論理的な解答を作っているから、君たちも論理性にこだわってほしいというメッセージでもあります」

苦勞しているのは定期考査の作問だと橋本先生が明かす。

「素材文の内容理解を見る設問が厳選されているのであれば、それは

当然定期考査の問題として出題するべきです。また、授業で学んだことが定期考査で出題されなければ、生徒の授業に対する信頼感にも影響するでしょう。とはいえ、定期考査で出す問題を授業で扱うことに当初は抵抗があったのも事実です。ですから、授業中に取り組んだ問題とは出題形式を変えるなどの工夫はしています。ただし、必ず授業で学習した考え方、論理性で解ける問題になるようにしています」

自分の答えに こだわり始めた生徒たち

生徒の読み方や解答内容が変わってきたのは1学年の終盤だった。

「定期考査の前に、『授業プリントの自分の解答が合っているか見てほしい』と生徒が現代文の質問に来るようになったのです。古文や漢文ならともかく、現代文で生徒が何人も質問に来るといのは初めての経験でした。もちろん、授業の内容が確実に定期考査に出ることが、質問に来る1つの理由だとは思いますが、自分の解答と教師の解答のどこが違うのかを確認して、自分の解答を練

り上げたいという、理解へのこだわりを感じました」(國生先生)

生徒にとって、現代文が自分で学習できる教科、やれば分かる教科になってきたことを、國生先生は生徒の授業態度からも感じている。

「『ここが根拠だから、こういう答えになるよね』と説明した時に、『確かにそうだ』としっかりうなずく生徒が明らかに増えました。また、授業プリントなどで書き直しを求められた際も、以前はどう書き直せばよいか途方に暮れる生徒がいました。が、今の学年は皆、根気強く自分の力で取り組んでいます。実際、生徒の記述力は高いと思います」

教師自身が以前よりも自信を持って授業をしていると、益田先生は率直に語る。

「私自身、以前は論理性をあまり意識せずに説明していました。今と比べれば、自分の説明に確固たる自信がなかったですし、正直、1コマ1コマの授業で生徒に何を獲得させたのか、明確に説明できなかったと思います。しかし今は、生徒に『今日は、こういう論理構成を理解してほしい』と自信を持って授業をして

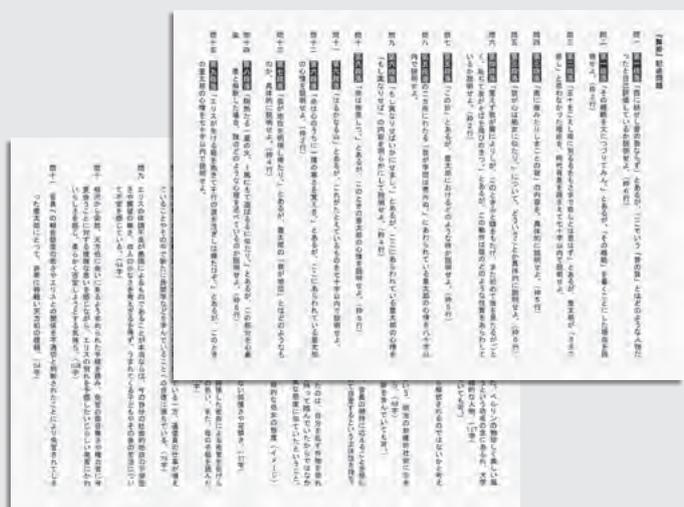
います。だから生徒も、私たちに対して自分の意見をぶつけてみる価値があると思ってくれているのではないのでしょうか」

論理的に考え抜くために、2年次では、生徒が自分の解答を自分で添削する形式も取り入れた(図2)。

「生徒の希望に基づいて難度の異なる課題を月に1回程度出しました。学力に応じた課題を出すことで、やりがいを感じられるようにしたかったからです。この時、解説も一緒に渡し、生徒には自分の解答を自分自身で添削した上で提出させました。私たちは、生徒の添削を見て、本文の重要箇所をラインを引いているか、説明が不十分な部分はないかなどを更に添削します」(益田先生)

「添削課題でも安易に納得しない

図1 済々黌高校3学年国語科 読解内容を問う設問と解答例



新しい単元に入る1週間前、3学年の国語科教師が集まり、論理的な読解が出来るかどうかを問う設問と解答例を作成し、共有する。

*学校資料をそのまま掲載

生徒が増えた」と國生先生は話す。「わざわざ職員室に来て、『先生の添削のこの部分には私は納得が出来ない。私は自分の解答の方がより良いと思う』と議論を仕掛けてくる生徒が増えました。そうした姿を見ると、これこそが自分たちが国語を通じて育てたかった生徒なのだと思えます」(國生先生)

「最近、授業でこちらが間違った時は、ここぞとばかりに攻めてくる

のです。先日私が間違いに気づき、訂正していると、『もっと良い解答があるはずですよ』と生徒が言い始めました。結局、50分間をその解答についての議論に使ってしまいました。もちろん決して嫌な気分ではありません。ワイワイと意見を言い合う中で、一人ひとりの思考が整理されていったのだと思います。そういう時間もたまにはあってよいと感じました」（橋本先生）

入試学力を高めながら 国際社会を生きる力を養う

3年間の指導で、新しい課題も見えてきた。その1つが、論理的思考力を定着させる教材の開発だ。

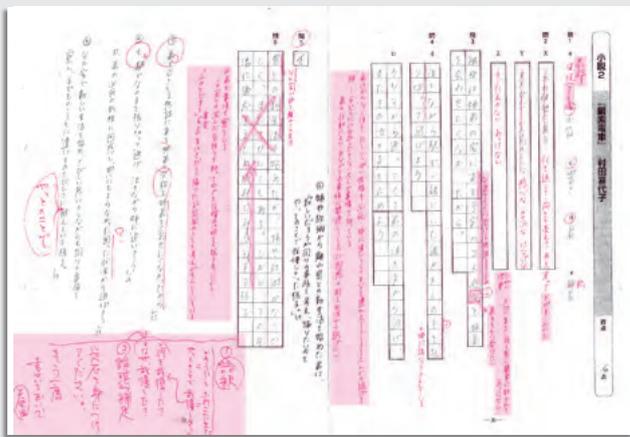
「同じ考え方で解ける問題を、素材を変えながらいくつも繰り返すことで、論理的な読み方や書き方を定着させるのが理想です。従来の現代文の指導には似つかわしくないでしょうが、同じ型の思考で反復練習が出来るような教材を開発したいですね。同じ論理で答えられる設問を作ることの出来る複数の素材文を探

すのは大変ですが、いつか挑戦してみたいです」（益田先生）

橋本先生も反復練習の大切さに同意する。

「現代文が苦手という生徒が反復練習をすることによって、『こうやって解けばよいのだな』と論理的な思考の型に気が付くことには、単なる受験テクニックの習得といった領域にとどまらない普遍性があります」

図2 済々黌高校3学年国語科 生徒が自分の解答を添削



生徒が解説を見ながら自分の解答を添削し、その添削内容を教師が更に添削する（網掛け部分が教師の添削）。2年次に月に1回程度実施。

*学校資料を一部改変して掲載

*出典／『現代文読解問題 基礎編』（駿台文庫）

半面、入試で求められる力の汎用性をもっと大切に考えたいと益田先生は話す。

「例えば、東京大の個別学力試験で求められる学力を、『難解な入試問題を解くためだけに必要なもの』と考える教師はいないでしょう。入試で求められる学力は、人生の選択の場面で必要な論理的に考える力に通じるものであり、そうした力があ

ってこそ、時にはあえて大胆に感情を優先する決断も出来るのです。生き方や働き方にも大きな影響を与え得る論理的思考力を、入試対策を通して身に付けさせていると強く自覚しています」

同校はスーパーグローバルハイスクール（SGH）指定校であり、「国際的素養を備え世界をリードする済々多士教育プログラムの開発」を進める。

国際社会を生きる素養として論理的・批判的思考力の育成も掲げており、国語科に対する期待も大きい。

「論理性が身に付くことで、他者に向き合う寛容度は高まります。正解が1つではない社会だからこそ、その時点での自分の答えにこだわらず、考え抜く力を授業で身に付けてほしいと考えています」（橋本先生）

変化の大きな次代を乗り切るために、論理的に答えを出すことにこだわる力の育成に取り組む同校。その身近な成果は、生徒が教師の言動にますます理屈で食い下がるようになった点だと益田先生はほほ笑む。

「我々の生活上の指導に対して、ある生徒が『先生方の発言には矛盾がある』と痛烈に批判を展開したことがありました。しかし、その言葉の直後、『ただ、10代の僕らには、理不尽さを体験することも必要だから受け入れようと思います』と言ったのです。大人を恐れず、思い通りにならないことがたくさんある人生を、論理という武器を持って生きようとする頼もしさを感じました」